

後者は三七事業（二〇〇四年）の宗教関連事業を持ち、これ以外に教育省その他の国家機関が部分的に宗教事業を行っている。つまり、仏教式学校事業はこれらの諸事業の一つに過ぎない。一方、これら宗教関連事業は、全体として統一されたものではないが、全国的に標準化され均質的な活動を展開している。

四 結論

本発表ではこのような行政の宗教（仏教）事業を、官僚をコーディネートとし、外部組織とつながり、省益局益と関わる多数の行政事業の集合体ととらえ、国教や国家仏教という用語に代わって、官制仏教と名付けている。これは市民宗教のうち為政者・エリート層の仏教・道徳・秩序意識の伝統と深くかわるものであり、また、ライシテが一定の状態とどまる状況や、ライシテ研究では見落とされてきた王制・王権の宗教性の問題にも関わるものと考えられる。

翻訳と布教

——タイにおける天理教の事例から——

永松 和 郎

日本の新宗教における海外布教に関する研究は日本起源の宗教が異なる文化圏での布教活動においてどのようなプロセスを経て受容、展開しているかを研究対象とするものであった。本発表ではそれらの研究ではあまり扱われてこなかった、「翻訳」に注目し、天理教という日本起源の宗教教義がいかにして、異

文化圏で翻訳され、布教されているのかをタイの事例を通じて見て行くことである。

一般的に「翻訳」とは「ある言語から他の言語へ、思想、感情などをそのまま量を増減することなしに移し運ぶ」という意味である（井上昭夫『世界宗教への道―異文化伝道入門』日本地域社会研究所、一九八二）。しかし翻訳をする場での議論は「逐語訳と意訳」「原文重視と訳文重視」「作者重視と読者重視」などの議論が盛んに行われていた。しかしこれが宗教教義の翻訳となると事態は異なる。宗教教義の翻訳では聖典などを翻訳する際に「神の言葉」としての役割があるため訳文より原文が重要視されるのは当然のことであろうし、作者と読者という関係性を見ても作者（＝神、教祖など）を重要視するのが当然のことと言えよう。宗教によって「翻訳」に対する概念は様々である。これは聖典、教典などと呼ばれる書物に対する態度が異なるからである。聖典や教典などは神、教祖などの言葉が記述されているため、原作者の立場に語学力だけではなく、信仰を持って接近しようとする試みが重要となるであろう。またこのような試みが教義翻訳に対する態度であり、翻訳を行う上で他の翻訳とは異なる条件と言える。

タイにおける天理教の布教活動は一九四三年に二代真柱・中山正善（一九〇五―一九六七）の発案により視察調査という形で二名がタイに五ヶ月間滞在したことが最初となっている。現在天理教は一九八二年にタイ教育省宗教局から布教認可証の交付を受け、文化活動のための組織として社団法人を設立し活動を展開している。

教義の翻訳はまさしくテキスト化された教えや語りを対象地域の言語に翻訳することである。しかし布教活動が進み、共同体が形成されると、儀礼の必要性も自ずと高まってくる。天理教の儀礼は、海外でも国内でも同じ方法で執り行われる。この儀礼の翻訳は言葉の翻訳とは事態が異なる。例えば、天理教の礼拝方法はタイには存在しないため、タイの慣習にあった形式に変更せずにそのまま行われる。儀礼の所作には意味があり、その意味をタイの慣習に合うように変更することが「儀礼」の翻訳となるのであろうが、この儀礼の翻訳は言葉の翻訳以上に困難だと言える。

さらに天理教教義がタイに受容されているかを判断する指標として訳語から発生したタイ語があるかを見ていきたい。例えば聖書が語源の言葉というのは日本語、タイ語に見ることが出来る。これは聖書の訳文が受容され、対象地域に定着した成果と考えられる。それを天理教のタイ語訳に対応させて見ていくと、天理教の訳語が語源となるタイ語は現在では見ることができない。しかし天理教の信仰者の中で浸透している天理教用語は徐々に増えて来ているため、今後の考察の課題となるであろう。

このように宗教に関する言葉や行為の翻訳と布教は相容れない領域のようであるが、この二つが相互に接近する部分を考察することで異文化布教の新しい側面を見いだすことが可能となり、今後多角的に異文化布教をとらえるための足場となるであろう。

植民地布教の実態と虚像

——朝鮮布教統計表の解析から——

工藤 英勝

一九一〇（明治四三）年八月、日本国による「韓国併合」が発効してから、百一年目を迎える今日でも、この条約に対する歴史認識は当事者間で共有されていない。

「韓国併合」はその後の実態からすれば、単なる政治的事件にとどまらず、民族、経済、文化、教育とりわけ宗教も巻き込んだ構造的ジェノサイドであると筆者は考える。

この植民地統治において、日本宗教の果たした役割や位相については、これまでさまざまな立場からの個別の論及はあるものの、いまだにその実態と全貌が明らかになっているとは言いがたい。

本稿では、朝鮮総督府による朝鮮布教統計のデータにもとづいて、その数値から日本国の統治下にあった朝鮮エリアの宗教団体の実態を解析する。

日本宗教（神道・仏教・基督教）の朝鮮布教に対する歴史評価については、支配者側と被支配者側またはアジア・太平洋戦争の前後とでは対照的な評価があるわけだが、筆者は日本宗教の役割や実態についてはある種の虚像や幻想が共通して存在していると考ええる。つまり、肯定的な文脈であれ、否定的なそれであれ、日本宗教の教勢と実態について過大に評価しすぎているのではないかという疑問がある。